

みなと元町

タウンニュース

No.
341

発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

市民の命を守る

神戸市消防局長 長岡 賢二



「リモート出初式」としておこないます。これまでの出初式映像や訓練の映像に加えて、神戸市在住の作詞家、松本隆さんの賛同と協力を得て、「瑠璃色の地球chorus」プロジェクトの一環として、エッセンシャルワーカーの方々、防災に携わる市民の方々、消防職団員が、「瑠璃色の地球」を歌い繋ぎ、市民の方々に勇気と希望をお届けいたします。映像は、市内の協力施設において令和3年1月4日から公開するほか、神戸市ホームページ、「KOBETV」、「YouTube」などインターネットでも配信しますので、是非ご視聴ください。

みなさまにおかれましても、感染対策を取りながらの日常生活や経済活動を維持することに大変ご苦労されていることと思います。引き続き、感染拡大防止のため、ご協力をいただきますようお願いいたします。

さて、火災に目を向けますと、去年は8月に多くの建物火災が発生し、残念ながら死者も発生しています。これを受けまして、住宅火災の発生防止及び被害軽減を目的とした広報を強化し、住宅火災予防上の注意点や住宅用火災警報器の設置、維持などの火災予防対策についての注意喚起を行いました。YouTubeでも火災実験動画を公開し、家庭内での火災予防に対する情報を動画でわかりやすく広報していますので、こちらもご覧いただければと思います。

近年、様々な分野でICTの進展と活用が進んでいますが、消防行政におきましてもICTの活用を推進しています。自然災害への備えとして、土砂災害に対する市民の防災意識向上を目的

に、災害を疑似体験できる「土砂災害VR」による研修等を実施しています。また、119番の通報者に、スマートフォンを介して現場の状況を送信していただく映像システムの「KobeLive119」を導入し、火災の状況や、救急車が到着するまでの急病人の状況を映像で確認できるようになりました。消防職員が現場到着前に必要な資機材を準備したり、通報者に適切な応急処置をお願いできますので、被害の軽減に役立てることを期待しています。

ハード面の整備では、建て替え中の兵庫消防署と西神南地区の新出張所が、令和3年度中に竣工する予定となっており、消防拠点の機能強化に努めています。

これからも市民の安全・安心を確保するため、職員一丸となり取り組んでまいりますので、今後ともご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。最後になりましたが、皆様のますますのご健勝とご多幸、そして今年一年が平穏無事でありますよう心よりお祈りいたしまして、新年のごあいさつとさせていただきます。

KOBETV



神戸市消防局ホームページ
『火災予防のための実験等動画一覧』

企業会員紹介⑧
走水神社 (はなみづじんじゃ)

【御祭神】天照大御神・応神天皇(厄神さん)・菅原道真公(天神さん)

【御神恩】厄除災除・開運・家内安全・健康・仕事運向上・商売繁盛・交通安全他
神戸元町の天神さん・厄神さんとして祀られる当神社は、約1100余年前の平安時代中頃、京の都より九州太宰府へ赴かれる菅原道真公(845〜903)が、走水村に立ち寄られ、村人達との交流深く高徳を施し、村人からも尊崇された事に始まる。死後、自身を追いやった朝廷や藤原一門に怨霊となり落雷・天変地異に陥る事は有名な伝説ですが、後年村人達は菅公への温情・尊敬を慕い、村の鎮守様として祠を建立し、篤く祀ったのが起源と伝わる。後に「天神社」となる。

また、ハシウドの名前の由来には



年間神事	
1月 1日	元日祭
1月 18〜20日	厄除け災除け祈願祭(厄神大祭)
1月 20日	古財布古小物入れ御焚上げ感謝供養祭
1月 25日	初天神祭(各種合格祈願祭)・祈年祭
3月 中旬	稲荷社初午祭
7月 25日	天神夏祭(例祭)

神戸元町商店街 楽市楽座 情報 1月

◇こうべまちづくり会館ギャラリー(無料) TEL361-4523

1月 1日(金)〜1月 4日(月)休館
1月17日(日)〜1月19日(火)「先天性サブリ見ナル」
1月22日(金)〜1月26日(火)ろうきん公募写真展

◇元町映画館(有料) TEL366-2636

1月 1日(金)〜1月 8日(金)『鷲鷲歌合戦』
1月 1日(金)〜1月15日(金)
『相撲道 〜サムライを継ぐ者たち〜』
『天井桟敷の人々』



栄町通まちづくり委員会は、12月11日(金)10時から10時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通クリーン大作戦を実施した。参加者は、(元栄海三丁目自治会)奈良山喬一、(神戸市)西山昌樹・川口雄也、(広島銀行)曾我部真介、(兵庫県信用組合)前田健輔・藤本吉英・篠原義晴・西尾和史・井上博行、(三鈴マシナリー(株))稲岡千硯、(㈱KKテクノ)松本美紀、(神明)竹広有佳子、(神明倉庫(株))藤尾憲弘・十時実希、(㈱イーエスプランニング)松坂仁美・川上格・八田将太郎、(佐野運輸(株))北島幸宏・末松明、(まちづくり会館)木原正剛、(新光明飾(株))中川俊・大森貴美子・藤田直之・篠原博明・西村友博、(佐田野不動産(株))佐田野宏之、以上26名みなさんでした。毎月第2金曜日午前10時、栄町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。



中央区自立支援協議会から多くのみなさんも参加

神戸駅東地区クリーン作戦

神戸駅東クリーンチームは12月4日(水)12時から、ハーバー懇談会地域のクリーン作戦を実施した。エスタシオン・デ・神戸から11名、ネットトヨタ兵庫(株)20名、元町通7丁目2名が参加した。

また、ちゅうおう障害者地域生活支援センターでは、12月3日から9日まで、障害者週間にあたることから、今年も、障がい当事者・支援者、その地域(中央区)に関わりのある多くの方々が集まり、もとまちハーバー懇談会主催のクリーン作戦に合流した。障害福祉への関心と理解を深めるため、清掃活動を通じて地域貢献を行うと共に、地域の様々な方とのつながりをつくっていくことを趣旨とした活動。今年で10回目になる。



海という名の本屋が消えた (86)

平野義昌

諏訪山界限(4)

「諏訪山界限」に関わりのある文人二人の足跡を追ってみる。文学史ではほぼ無名と言ってよいだろう。まず江戸時代の俳人「松間堂它谷(しょうかんどう・だこく)」。「諏訪山神社に句碑が建っている。建立年月、建立者不明。〈南海眺望 紀の海の阿波へ流るゝ月夜かな 它谷〉(写真)

俳諧研究者・坂井華溪(かけい、1896～1955年)が詳しい。「它谷」は兵庫福原の人(補註1)、生年没年など謎の人物だった。「它谷」初見は中山寺奉納「三千燈」(宝暦11年、1761年)掲載の句、「捨石の苔ともならず落葉哉 蛇谷」。これ以後の句は「它谷」名。与謝蕪村「辛卯歳旦帳」(明和8年、1771年)に収められるなど、天明6(1786)年まで多くの俳書に掲載されているが、その後途絶える。「紀の海」は安永2(1773)年の俳書にある。註1

京都大学教授・額原博士(江戸文学の額原退蔵、1894～1948年)が京都の古書店で『松間堂句集』を探し出し、坂井も「管見の機会」を得た。戦後まもなくのことだろう。序文は松岡土川(しせん、1742～1816年)、灘・大石の酒造家で蕪村門下且つ後援者だ。「它谷」死後の出版であること、「它谷」が70～80歳代にかけて病に伏したことが記される。刊行年の記載はないが、句作途絶の理由は判明した。郷土史家・川島禾舟(かしゅう、1879～1952年)が追谷墓地無縁仏に「它谷」墓石を発見。1915(大正4)年の城ヶ口墓地廃止、追谷移転の結果だろう。同じく郷土史家・江口良橋(りょうこう、1895～1951年)の探索により、没年は寛政4(1792)年(よって『句集』出版はこれ以降)、通称「元竜」、住まい兵庫松屋町(現在兵庫区本町)、と明らかにになった。註1

坂井の「紀の海」鑑賞。〈明朗淡々とした句境で、皎々たる月夜に照らされて金波銀波が遠く紀淡海峡の方へ、流れてゆく渺茫たるちぬの海のさま、全く一幅の画である。(後略)〉註1

坂井は、碑の文字は「它谷」の自筆を刻したもの、と考える。句品・位置とも神戸市内の句碑で最上、と讃えている。註1

蛇足ながら、「ちぬの海」は「茅渟海」、和泉国と淡路島間の海の古称、広く大阪湾を言う。ちぬ鯛に代表される豊富な漁場である。万葉の昔から歌われ、校歌にもよく登場する。

坂井は、俳号「它谷」を再度山中の「蛇谷(蛇ヶ谷)」に由来、と考える。「它」は「蛇」の原字。話は奈良時代、皇位を狙う弓削道鏡とそれを阻止する和気清麻呂の闘争に遡る。清麻呂が道鏡の刺客に追われ摩耶山中に逃げ込み、大蛇に助けられた。清麻呂はこの地に如意輪観音を祀り、霊場・摩尼山(まにさん)を開いた。唐渡航前ここで空海が修行。航海の往復、竜が出現して暴風雨から船を守り、帰港すると摩尼山の方角に消えた。空海が無事感謝して摩尼山に登ると、南の「蛇谷」に竜が現れた。空海は霊場に寺を建立し、「大龍寺」と名付けた。山名「再度山」は空海が唐渡航前後2度登ったことにちなむ。登山道「大師道」の名も残る。註2

蛇が竜になったが、「元竜」とのつながりを感じる。以下坂井の考察。「元竜」名から「它谷」は医師ではないか。さらに、同時期福原に俳人「周蛇(しゅうだ)」が存在、血族か師弟関係だろう。「大龍寺」にある

松永貞徳(1571～1653年)の句碑「秋草にあんまとらせて苔の石」に、建立者「五世周蛇」の名がある。この碑も年代不明だが、諏訪山「它谷」碑と呼応しているのではないか。証拠はない。長年研究を重ねた俳諧探偵の推理である。註1

文学研究者・宮崎修二郎は、坂井ら「故人のひそやかな営々の「郷土探索」が、こんにちの神戸文化の礎石」と言う。註3

次は短歌。〈キネマの月巷(ちまた)に昇る春なれば遠く声して子らは隠れぬ〉

稲垣足穂初期の作品「或る小路の話」、副題に「キネマの月巷に昇る春なれば」と付される。春の夜、「私」は友人に「ガスの光で育ったような顔」の女の子を紹介すると誘われ、中山手の小路に行く。彼女は不在。落胆して道を戻ると空に満月が昇っていた、という話。後に「友だちの歌からの借用」と告白した。〈……アスファルト街上にまんまるい月が昇って、その下で青い眼の連中が隠れん坊をやっていると言うのであろう。／この神戸三宮の山手の夜間雰囲気か、私に『一千一秒物語』を書かせた。〉註4

友だちとは関西学院の同級生・猪原(いはら)太郎。足穂より1歳上、病気で1年休学し、4年生で同級。彼は退学した今東光と親しくしていた。足穂と詩をやり取りし、本の感想を述べ合うようになる。猪原が登場する作品がある。1が猪原、江美留が足穂。〈……或る昼休みの教室の黒板に、1は、「六月の夜の都会の空」という九字を走り書きして、直ちに消してしまった。「いや何でもありゃしない」と彼は甲高い声で江美留に云った。「——でも、ちょっといい感じがしやしないかい?」〉註5

江美留は1の感想を理解した。「夕星を仰いで空中世界を幻視する」イメージが広がる。互いを刺激し合う文学の友であった。〈——午後の授業が始まるとすぐに、後ろの席から丸めた紙片が飛んできた。ひろげてみると、「六月の夜の都会の空」と題した詩が書いてあった。遣られた! と江美留は思った。(中略)／／火竜の乱舞／月が笑う……／生と死のたまゆらに遠い未来を望む飛行者よ／／このお終いの三行が江美留の頭に残り残されて、いつの間にか彼自身の様式を採りかけていた。〉註5

猪原は友人に苗字「猪」の字が気になると言われ、「T・E・バラ」「T・イバラ」「酒場星人」「ドミトリ・イハラ」などと署名するようになった。註6

1919(大正8)年、二人は卒業。猪原は中央郵便局勤務。足穂は東京で自動車運転免許取得後、明石に戻り飛行機製作や創作の日々。〈ドミトリは(中略)一度、勤めをサボって、当時流行のカウボーイ帽をかむって明石へ顔を出してからは毎日のように、弁当持参で私の家の玄関へ立つのだった。〉註6

猪原が足穂未知の作家・佐藤春夫について語る。春夫は昼の光線が嫌いで雨戸を閉めランプを灯して書いている、と。足穂は春夫に自分の作品を見てもらいたい、と手紙を出し、21(大正10)年春夫門下に入った。猪原も上京して来る。猪原はカミソリを携帯してトラブルを起こし、火のついた炭を投げつけるなど、行動が危なくなる。足穂は、彼の作品に独特の感覚がなくなった、とも思う。註6

1925(大正14)年、猪原は「猪原一郎」名で「月光を盗む」(「文芸時代」金星堂)を発表、今東光の紹

介による。続いて、「文党」(文党社、今東光主宰)5月号に「月、汽車、訪問」寄稿。東光が「猪原発狂」(実際は「頭の中」にできた「腫瘍様のもの」の手術)の知らせを受け、12月号に「荒談」を掲載。同号編集後記で「かかる境地を開拓した最初の人」と紹介した。註7、註8

足穂は東光に抗議の手紙を出した。猪原が年長の友人であり、互いに影響し合ったことは事実だが、猪原が「かかる方面の開拓者のはじめとは小生の星とお月さまが泣きます」と、自らの文学的独自性を主張した。また、猪原が「まるっきりの発狂でなく」、京都で療養中であることを伝え、猪原作品掲載に感謝の気持ちを表している。〈あなたにも心配をかけ、またこの不幸なイハラの文学が活字になったこともあなたという人がなかったら出来なかったことで、その点についても、数少ないイハラの友人として一度お礼をしようと思っておりますが機を得ず、今日に至って右ちょっとペンを走らせたようなわけです。〉註9

26(大正15)年1月、東光は「文党」にこの手紙を掲載。文学者・学校の先輩として誠意を示した。足穂が作家・足立巻一に話している。自分の死後文学碑は一切ご免こうむるが、「他人が勝手に立てるのだったら、猪原のこの歌をローマ字で、旧トーアホテルの近辺に建ててもらいたい」。註3

猪原のその後は不明だ。足穂と猪原は火竜舞う満月の空を飛行して、子どもたちのかくれんぼを眺めている。私はそんな想像をする。

註1 坂井華溪「摂西兵庫俳諧史」みるめ書房、1959年。戦前坂井は俳誌「ひむろ」主宰。
註2 田辺眞人「神戸の伝説 新版」神戸新聞総合出版センター、1998年
註3 宮崎修二郎「ひょうご歌ごよみ」兵庫県書籍協同組合、1984年
註4 『稲垣足穂作品集(タルホ集6)キネマの月巷に昇る春なれば』潮出版社、1975年
註5 稲垣足穂「弥勒」河出文庫、1987年
註6 稲垣足穂「人間人形時代」工作舎、1975年
註7 『足穂拾遺物語』青土社2008年、高橋孝次解題より
註8 高橋信行「同人誌」『稲垣足穂の世界 タルホスコープ』平凡社、2007年
註9 「『文党』への手紙」『稲垣足穂全集13』筑摩書房、2001年
補註1 地名「福原」は「摂州八部郡福原庄」のこと。平清盛福原京にちなむ。現在の中央区西部(旧生田区)から兵庫区にあたる。
補註2 今東光について、関西学院の資料(Web「関西学院事典」)は1912(明治45)年入学、15(大正3)年退学としている。足穂は東光退学を14(大正2)年3年生1学期終了後と記憶。猪原について、足穂研究者は「猪原が二年留年して、足穂とのやり取りが始まったのは、足穂が五年生になってからではないだろうか」と指摘している。高橋信行「『美しき学校』をめぐる」(「ユリイカ」総特集稲垣足穂、2006年9月臨時増刊号、青土社)



乙仲通 界限の魅力と可能性

乙仲さんぽ活動報告 6

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部 兵庫地域会 乙仲通界限デザインワークショップ実行委員会



「乙仲らしい」商空間とは

我々、日本建築家協会(JIA)近畿支部兵庫地域会では、2015年から3年間に渡り、「乙仲さんぽ」と名付けた乙仲通界限をフィールドとしたワークショップを、関西の大学生達と一緒にに行ってきました。その記録を連載させていただいておりますが、その6回目として学生たちの感じた「乙仲らしい」商空間についてご紹介します。2015年にはまちあるきを通して見つけたテーマに沿って、地域住民を交えたグループワークを重ね、魅力の発掘や背後に潜む問題分析を行いました。2016年にはこれまでの成果を踏まえながら、乙仲界限のさらなる魅力アップと課題解決に向けた提案をコンペ形式で募り、参加建築家や地元の方々でブラッシュアップした提案を、乙仲通りの各所にて作品展示しました。2017年には乙仲界限の店舗の方々にはアリングを行い、地域と密着した現実的な提案につなげていきました。

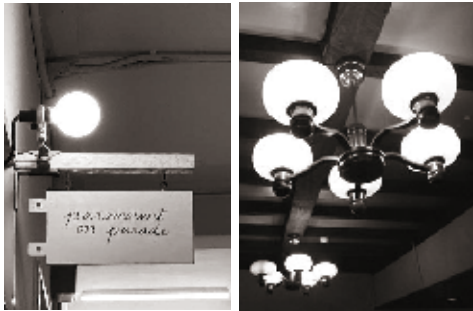
この乙仲さんぽワークショップを通して、学



個性的なA型看板とおしゃれな街並み



タイムスリップしたかのようなレトロビル



印象的なインテリアエレメント

「乙仲さんぽ」を通して

私は幸運にも1年目から「乙仲さんぽ」に携わることができました。神戸に住んで20年以上、神戸に事務所を構えて10年以上経った時でした。昔から知っているつもり乙仲通は興味深い時代の変化とともに、知る人ぞ知る隠れ家的なおしゃれスポットとして定着し、これからの乙仲通の発展に向けた活動に、微力ながらお手伝いできることは素直にうれしく思いました。もちろんこれまで乙仲通には何度も訪れたこともあり、いくつかのお気に入りのお店もあったわけですが、改めて学生たちとまち歩きをしてみると全体像をなかなか掴めませんでした。「不思議の国のアリス」状態で自分がどこにいるか、どの方向を向いているのかも狂わされる感覚です。一般的なまちづくりでは問題視されてしまいそうな「わかりにくい迷路のような店舗群」は、初めて訪れる学生たちも最初は困惑した様子でしたが、次

生たちの意見をまとめてみると、大正～昭和初期に建てられたレトロビルが建ち並び、狭い路地により裏通りの奥深い街は、タイムスリップしたかのような感覚を味わえる「映える」街並みであると同時に、知っていると自慢できるおしゃれで個性的なお店が多く、隠れ家的なスポットだと好印象でした。その中で乙仲通の魅力の一つでもある印象的なエクステリア・インテリアエレメント、個性的な看板、それらとレトロビルが生み出す異質な雰囲気をフリーペーパーにまとめるアイデアが生まれました。また乙仲通に点在するすきま空間を使った休憩などにも利用できる共有空間をつくることで、訪れた方の利便性向上だけでなく、乙仲通全体がひとつの共同体であることを示唆し、店舗同士・利用者同士のコミュニティの場になればというアイデアもありました。さらには乙仲通の夜の暗さも問題視し、夕方以降も楽しめるように点燈時間の工夫やライトアップ、期間限定のライトアートや夜マルシェイベントなど夜間の乙仲通の楽しみ方の提案などもあり

ました。詳しくは「乙仲さんぽ 2015-2017 「地域×学生×建築家」3年間のあしあと」をご覧ください(右記QR参照)。

学生たちとの乙仲さんぽワークショップを通じて、乙仲通の魅力を再確認することができました。自然発生的に増殖したA型看板に誘導されながらお目当てのお店に出会う楽しさ、狭い路地(もしかしたら建物内でも?)で迷子になりながら偶然出会う唯一無二の経験、気ままな街歩きから偶然の運命的なお店との出会いなど、他では味わうことのできない乙仲通だけの体験を得ることができます。この豊かな体験は現代の典型的なショッピングモールとは対照的であり、無秩序にアピール合戦を繰り返す看板に埋め尽くされた通りなどでは決して体験できません。乙仲通にとってこのような魅力を最大限活かしながら未来に向かうことが、他の商空間との差別化となり、これからも残しておくべき「乙仲らしさ」となるのではないのでしょうか。

味なままにするのではなく、明快に言語化することにより、これから乙仲通に出店するオーナーと容易に共有化することができ、乙仲通がこれからも変わらず魅力的であり続けることができ、さらには外部への発信力もより強くなるのではないのでしょうか。個人的な思いではありますが、乙仲通全体のブランディングデザインが生み出され、そしてその考えが浸透し、ひいてはまちづくりの指針などが作られることで、収益重視の開発が減少し、いつまでも魅力あふれる「不思議の国」乙仲通であり続けられることを願っています。JIA兵庫地域会 地域まちづくり委員会では、そのお手伝いができればと考えています。



三宅 正浩(みやけ まさひろ)
(株) y+M design office 代表／
成安造形大学 准教授